

当時の様子が思い出される。

僕がケニアを訪れたのは2016年10月であった。若い頃からアジアやアフリカなどで研究・調査を行ってきた研究者とは違って、僕は初アフリカ渡航の数年前まではアフリカを訪れることなど考えたことすらなかったが、田中さんに導かれてケニアの首都ナイロビの北西約100kmに位置するオルカリア近辺を訪問した。ケニア渡航の主な目的は、総合地球環境学研究所（地球研）のプロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」¹の活動を映像で記録することであった。

オルカリアでは最初に、同地で調査を行っていた文化人類学者のベノワ・アザールさん、日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターの溝口大助さんら数名の研究者たちとマサイの集落を訪問した。真っ赤な布を身体に巻き付けた集落の家長であるジェレミー・サイタバウ・タニンさんは、昔ながらの牧畜をしつつ、農業や観光にまつわる仕事も生業としていた（写真31）。

都市部で暮らすマサイが観光客相手に商売するという構図は、テレビやネットで見ることができるが、ここはジェレミーさんの集落以外、360度見渡す限り遮るものもない大平原である。僕が直接聞いた限りだと、実際は「観光」という単語を使ってはいなかったのだが、ジェレミーさんは、僕が彼の集落を訪れた際に、ヨーロッパから訪れた友人を案内しなければならぬと忙しそうにしていた。ヨーロッパからこんな僻地に観光気分で行く時代になっていたことに大変驚かされたのを思い出す。

牛糞でできた家屋とスマートフォン

ジェレミーさんの集落では、周囲に遮るものが何もないので、夜になると広大な宇宙を感じる丸い星空に包まれることになった。僕の感動が筆舌に尽くしがたかったことは想像に難くないと思うが、このとき満天の星空の下、ジェレミーさんの息子と雑談する機会があった。ジェレミーさんの民族衣装とは対照的に、彼はジーンズにTシャツといった

洋服を来ており、手にしていた最新のスマートフォンでいくつか写真を見せてくれた。

光に包まれた暗闇の中で、牛糞で建てられた家屋の前にスマートフォンの画面をスワイプする彼のこなれた指先を目の当たりにしたとき、その指先の動きが僕の常識を軽々と逸する出来事のように感じられて、僕は苦笑しながら「綺麗な写真だね」などと答えるしか仕様がなかった。

澁澤龍彦(1928-1987)の小説『高丘親王航海記』(1987)の中で、天竺を目指す高丘親王(799-865?)が旅の道中で大蟻食いに会う場面がある。ここで澁澤は、高丘親王と同行していた儒良(じゅごん)に「大蟻食いという生きものは、いまから約600年後、コロンブス船が行きついた新大陸とやらで初めて発見されるべきものです。そんな生きものが、どうして現在ここにいるのですか。」と語らせている。スマートフォンは、近代化の進んだ都会で使用されるべきものである。電気も通わぬ牛糞の家屋に暮らす青年が、どうして最新のスマートフォンを流暢に操っているのか。僕の心境は、まさに儒良と同じであった(写真32)。

インスタ映えしそうな成人儀礼の聖地

このときマサイの青年が最新のスマホで見せてくれたのは、成人儀礼のための聖地の写真であった。まんまるに広がる満点の星空の下での最新のスマホというコントラストが記憶に強く残っていることは先に述べた通りだが、青年が見せてくれた聖地の写真が僕の複雑な驚きを増幅させていた。その理由は、同じ日の日中に、まさにその聖地を目指して田中さんらと一緒に出かけていたからである。

ジェレミーさんの案内でサバンナの平野をしばらく歩いて行くと、火山でできた巨大なクレーターが目の前に広がった。クレーターの真ん中の島の部分がどうやら目的地のようだった。その目的地に至る道と言えるようなものはなく、岩石のあいだを縫うようにクレーターの溝の底部分まで下ることになった。しかしながら、片道2時間半程で目的の聖地に到着するだろうというジェレミーさんの言葉とは裏腹に、4時間たってもまだ片道の半分も進まない(写真33)。



写真32：ジェレミーの暮らす集落(筆者撮影)

殆どロッククライミング状態の中、僕は重い撮影機材を抱えて、ジェレミーさんらにどうにかくっついて撮影を試みていた。しかし情けないことではあるが、研究者の皆さんは余裕豊饒と目的地へと歩みを進めていたのに、僕がリタイア第一号となってしまったのである。仕方がなく、ジェレミーさんに機材バックを背負ってもらい、撮影もままならぬままヨロヨロと途中で引き返すことになった。

最短ルートに戻るために、ジェレミーさんは刀を振り下ろしながら枝を刈り、道を切り開きながら引き返す。その頼もしい背中を臆気に追いつながら、己の体力不足を心の底から反省したことが思い出される。

ちょっと判断を間違えば、水も食料もなく、一晚クレーターの溝の底で過ごすことにもなりかねないような過酷な道程を、マサイの青年は、まるで近所の観光地に散歩に出かけるかのように訪れ、インスタ映えしそうな写真をスマホで撮影して暮らしを彩っているのだ。満点の星空の下での僕のアナクロニスティックな感動が、なんとも形容しがたい複雑な驚きを伴っていたことは、想像に難くないだろう。

自分の外側のフレームを壊す サバンナの水浴び

汗だくになり息を切らしながら、どうにかジェレミーさんの集落まで戻ることができたのだが、彼の集落には電気も下水道も整備されていなかった。ゆえに、風呂もなかった。ケニアでは数日間風呂に入っていなかったため、水浴びをするため、水場まで歩いて行くことになった(写真4)。

何も無いサバンナの平原を30分か40分程は歩いてだろうか。ようやく水場に到着したが、そこは元々、地熱による水蒸気が湧き上がっていた場所であった。オルカリアには、いくつもの火口からなる火山体があるため、このエリア近辺にはたくさん水蒸気の噴出口があり、その水場はそのひとつであった。ジェレミーさんたちは、噴出口に金属パイプを差し込み、水蒸気を冷やして水を作っていた。その水を飲み水や水浴びなどの生活用水として利用しているのである。

ただ「水浴びする」というだけで、こんなにもその「水浴びする」という行為に至るプロセスが都会的な暮らしと異なるものなのか。「暑い日差しを浴びながら、サバンナを30分近く歩く」ことと、ただ「水浴びする」ということが、意味の上ではどう考えても結びつかない。しかしながら、自分の常識的な感覚だと目的のために必要な手段がどこかで捻れて引き伸ばされているような状況が、実際に目の前で当たり前展開されているのを見ると、自分自身を形作っている外側のフレームみたいなものが壊されるようで、とてもワクワクしたものである(写真34)。



写真34：水浴び後の田中(筆者撮影)

¹「砂漠化をめぐる風と人と土」は、準備段階を含めると2010年～2017年まで足掛け8年間にわたって展開された地球研の研究プロジェクトで、資源・生息環境の荒廃と貧困問題が複雑に絡み合う砂漠化の最前線と言われるアフリカやアジアの半乾燥地を対象地にしている。地域の風土への理解を深めながら、現地の人々ともに、暮らしの安定や生計の向上につながら、同時に環境保全や砂漠化抑制が可能となるようなアプローチを探っていた。その基本的な発想は、砂漠化に対処するためには、「ヒトVS自然」ではなく「ヒトも自然も」という発想の転換にある。



写真33：成人儀礼の聖地を目指す一行(筆者撮影)